３．シカゴ社会学

（１）シカゴ大学

●ロックフェラー基金

1892 年、ロックフェラーの寄付をもとに設立。ロックフェラーがハーパーに相談。
初代学長、ウィリアム・レイニー・ハーパー（イェール大）。
革新的な大学制度を構築。〈教育志向から研究志向へ〉。

●大学院大学

それまでは、アメリカの大学は教育中心。研究者になるためにはドイツに留学するのが一般的パターン。

19 世紀後半アメリカ資本主義の発展。アメリカでの独自の研究が求められてくる。

→経済発展に見あった文化発展の必要性。加えて、産業化・都市化にともなう社会問題の解決。

●シカゴの魅力

文化的威信は、東部に比べて低かったが、新しい都市文化を生み出しつつあった。伝統に縛られない、革新的で自由な気風があった。

1879 年　シカゴ美術館――古典派と印象派の絵画のコレクション。
1891 年　セオドア・トマスのシカゴ交響楽団。
建築――ルイス・サリバン（摩天楼）、フランク・ロイド・ライト（住宅）。
都市文芸――カール・サンドバーグ（シカゴ詩集）。

●ハーパーの手腕

給料を当時の平均の２倍にする。
教育負担を軽減して、大学院専任の教授ポストをつくる。
大学出版会を大学の機関の一部として設立。

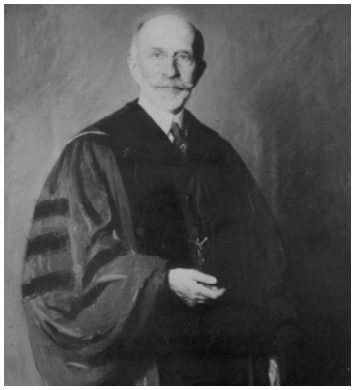
●地元の都市とのつながり（社会改革運動）

バプティスト教会の基金を受け入れる（シカゴ大学の前身はバプティストの神学校）。
ハル・ハウスを中心とするセツルメント活動（牧師と上流階級の婦人）。
大学では、公開講座が設けられ、市政改革をめぐる議論が交わされる。
リベラル・プロテスタンティズムを背景とする社会改革の拠点となる。

（２）シカゴ大学社会学科

1892 年設立。世界初の社会学博士を出す社会学科。

●初代学科長アルビオン・スモール（1854-1926）



バプティストの牧師の家庭に生まれ、バプティストの牧師として教育を受ける。

コルビー大学卒。ドイツに留学、政治経済学を学ぶ。

ジョンズ・ホプキンズ大学で博士号を取得。

コルビー大学に勤める。やがて、学長に。学長の講義、道徳哲学を社会学に替える。

ハーパーからの打診を受け、社会学をやりたいと申し出る。

ハーパーは、この申し出を受けて学科長として採用。シカゴ大学社会学科が誕生。

http://www.asanet.org/governance/small.html

ハーパーは、同時に、同じバプティストの牧師で、社会事業の専門家であるチャールズ・ヘンダーソンを採用。

①社会科学をつうじて、社会改革を追求しようとする。リベラルな立場から資本主義を批判。リベラル・プロテスタンティズムの改革運動の科学的正当化をめざす。

②社会学の範囲を確定しようとする。

学問的影響力の点では、同時代の社会学者に劣っていた。

スモールの貢献　社会学を制度として確立した。

① 1895 年　シカゴ大学出版会から、『アメリカ社会学雑誌（American Journal of Sociology）』を創刊。

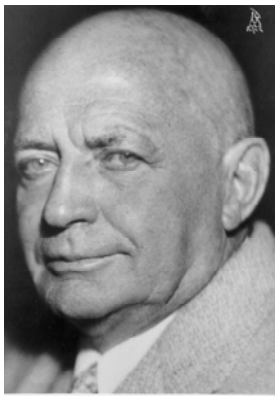
② 1905 年　アメリカ社会学学会（American Sociological Society）の創立に尽力。（今日のアメリカ社会学会［American Sociological Association］の前身）。

③学生たちに、シカゴをフィールドとする調査活動を奨励。

→ヘンダーソンとの緊密な協力の下で学生を指導。

やがて、シカゴで育った W.I.トマスと G.ヴィンセントが教授陣に加わる。

● W.I.トマス



ヴァージニア州出身で、牧師の息子。

テネシー大学で古典を学ぶ。1886 年、テネシー大学で博士号取得。

1888 ～ 89 年、ドイツに留学。民俗心理学と民族学を勉強。

オバーリン大学で英語を教える。スペンサーを読んで社会学に関心をもつ。

1893 年、30 歳でシカゴ大学に入学。

1896 年、シカゴ大学で社会学の博士号を取得。1895 年からシカゴ大学で教える。

http://www.asanet.org/governance/thomas.html

博士号取得後、ヨーロッパ旅行。このとき、移民の母国とアメリカでの移民の状態を比

較するという着想を得る。
1908 年、ハル・ハウスの女性相続人、ヘレン・カルヴァーから研究資金を受け取る。
ポーランド農民の研究を開始。1913 年まで、毎年８ヶ月ほど調査旅行に出かける。
ワルシャワで、移民協会に勤める哲学者、ズナニエツキと出会う。
1914 年、ズナニエツキがシカゴに訪問。第一次世界大戦が勃発。ズナニエツキを共同研究者として『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』を執筆。

●『ポーランド農民』
　手紙、生活史などの分析をとおして、ポーランドからシカゴに移住した農民がどのように態度を変容させていったのかを記述。
　伝統的な社会組織が解体することにより、従順な農民が、野心的で反抗的な態度を身につけていく。
　社会組織の解体→伝統的な価値の衰退→新しい現実の経験（「状況の定義」）→新しい態度の発達→再組織化。（客観的な社会的価値と主観的な個人的態度の相互作用）。
　「状況の定義」――社会的価値と個人的態度についての個人の意識（反省過程）。
・社会組織の解体が、犯罪や非行を生み出すというシカゴ学派の視点（社会解体論）。
・シカゴで最初の本格的な経験的研究。シカゴ社会学のさきがけ。

●パークとの出会い
　1912 年、トマスは、アラバマ州タスキーギでの人種問題会議に招待され、そこでロバート・パークと出会う。パーク―― 1920 年代のシカゴ学派都市社会学の指導者。
　トマスは、パークと意気投合して、パークをシカゴに招聘。
　パークは、1913 年からシカゴ大学で非常勤講師として教えはじめる。

● 1910 年代の世代交代
　スモール、ヘンダーソン、ヴィンセント、トマスの「ビッグ・フォア」。
1911 年、ヴィンセントがミネソタ大学の学長に就任（1908 年離任）。
1915 年、ヘンダーソン死去（1914 年退職）。
1918 年、トマス、スキャンダルで解雇。ニューヨークに向かう。
代わって、1913 年、パーク（非常勤）
　　1916 年、アーネスト・バージェス（シカゴ大社会学卒）。
　　1920 年、エルスワース・フェアリス（シカゴ大心理学卒）。
1920 年代のシカゴ大社会学の陣容が出そろう。

●シカゴの発展とシカゴ社会学
　19 世紀後半、アメリカ資本主義の発達。都市化の進展。都市にさまざまな問題が噴出。
　リベラル・プロテスタンティズムを背景とする慈善活動や社会改革運動。
　大学も、教育志向から研究志向に転換。シカゴ大学は最初の成功例。世界最初の社会学科をつくり、経験的調査研究に志向。やがて社会改革主義から客観的な因果連関を重んじる科学的な社会学へと脱皮。